すいはく
No.36
博物館だより
吹田市立博物館
SUITA CITY MUSEUM

吉志部神社本殿跡の調査を実施!

吉志部神社本殿跡基壇の調査風景

吉志部（きしべ）神社本殿は慶長15（1610）年に建てられた七間社流造（しちけんしゃながれづくり）の本殿で、国の重要文化財に指定されていましたが、平成20（2008）年５月23日に放火により失われてしまいました。将来的な本殿復興に当たり、遺構の保存状況を確認するため、同年11月に確認調査を行いました。

調査の結果、本殿基壇の築きかたの過程が判明しました。また、基壇の下にはより古い建物跡の一部と考えられる穴がいくつか見つかっており、今後詳しく検討していきます。

（西本安秀）

近年の市内の遺跡発掘調査の成果

吹田操車場遺跡の確認調査

現在、吹田市が「緑と水につつまれた健康・教育創生拠点の創出」を目指したまちづくり計画の策定を進めている旧吹田操車場の跡地において、平成19（2007）年12月から平成20（2008）年７月に59か所の調査区を設けて確認調査を実施しました。

調査では、旧石器時代から中世の遺構や遺物が認められ、時代や保存状況、密度に差はありますが、調査対象地区全域において遺構・遺物が存在することが確認できました。中でもNo.24・No.48・No.54・No.55調査区では、飛鳥時代のものと考えられる遺構・遺物が認められ、No.24調査区において建物跡が確認できました。また、No.41調査区では平安時代の柱穴跡、No.25・No.30・No.45では古代以前の大型土坑（どこう）がまとまって検出されました。このほか、No.58調査区からは旧石器時代の国府型（こうがた）ナイフ形石器が出土しました。

（賀納章雄）

調査区配置図

No.48調査区　出土須恵器杯

No.30調査区　古墳時代土坑

No.24調査区　飛鳥時代建物跡

吉志部瓦窯跡の調査

岸部北４丁目の紫金山公園に所在する吉志部瓦窯跡は平安宮の宮殿に使用する瓦を焼成しており、昭和46（1971）年に国の史跡に指定されました。平成20（2008）年３月に窯跡の状況等を確認するための調査を実施し、今回の調査地点にはこれまで計５基の平窯があることが想定されていましたが、調査の結果、計10基の平窯が計画的に配置された状況が確認され、吉志部瓦窯跡がさらに大規模な操業規模の窯場であることが明らかとなりました。（増田真木）

調査で見つかった平窯

調査で見つかった瓦

吉志部神社本殿跡基壇の調査

本殿跡基壇は火災によって傷んだ部分はありましたが、本殿の柱がのっていた礎石はほぼ元の位置で残っていました。礎石には、文字や線の墨書も認められました。確認調査によって、基壇は硬い粘土・砂層等の地山の上に２～３層の土を盛ってつき固めて整地された後に、穴を掘って礎石が据えられたこと、その後、本殿に覆屋がかけられた江戸後期に基壇周囲が整備されたことがわかりました。

（西本安秀）

本殿跡基壇全景

本殿跡基壇掘削状況

旧西尾家住宅の石燈籠

旧西尾家住宅には現在19基の石燈籠が確認されています。火袋部分の形状で四角形石燈籠と六角形石燈籠に分類できます。四角形石燈籠には一休型、雪見燈籠、六角形石燈籠にはいわゆる名物燈籠の写し（広隆寺型、平等院型、般若寺型、春日燈籠）が含まれます。旧西尾家住宅の石燈籠は近世以降のものと考えられますが、それぞれ趣があります。

旧西尾家住宅の石燈籠位置図（＊図中番号は写真番号に対応）

＜六角形石燈籠＞

13

火袋に円窓があり、鹿の彫刻があります。

18

宝珠を削り出した笠、火袋、中台、台石で構成されています。火袋に円窓２つがあります。

＜名物燈籠の写し＞

12　春日燈籠

春日燈籠といわれる一般的な形です。火袋に鹿と三笠山の彫刻があります。

9　平等院型

京都・宇治平等院の石燈籠（中世）の写しです。火袋が二方に大きく開いているのが特徴です。

10　般若寺型

奈良・般若寺の石燈籠（中世）の写しです。火袋に孔雀・牡丹・獅子の彫刻があります。

11

火袋は一部欠失し、詳細不明です。

17

基礎がなく、火袋に日・三日月・三引の窓があります。

8　広隆寺型

京都・広隆寺の石燈籠（中世）の写しです。火袋に格子が刻まれています。

15

火袋に円窓があり、鹿の彫刻があります。

16

基礎がなく、火袋に日・三日月・三引の窓があります。

14

笠の蕨手は弱く表現され、火袋に蓮華の彫刻があります。

19

笠以下が六角形に統一され、火袋の四面に四方仏が刻まれています。

＜四角形石燈籠＞

1　一休型

笠以下が四角形で統一され、火袋の三ツ星の窓が特徴の一休型といわれるものです。

2　一休型

3

火袋に日・三日月の窓があります。

4

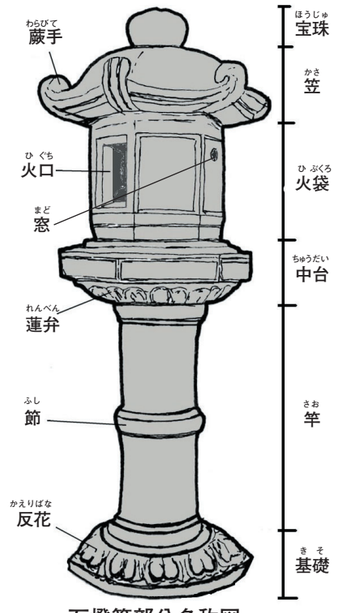
笠に宝珠が削り出され、竿は円形です。火袋に日・三日月の窓があります。

5

小型の燈籠で、火袋に三角形を２つ連ねた重ね鱗の窓があります。

6　雪見燈籠

火袋は四方に大きく開き、中台の下は四脚です。



石燈籠部分名称図

7

小型の燈籠で、火袋は欠失しています。台石に四方仏が刻まれています。

庭園の風景

旧西尾家住宅の石燈籠について

旧西尾家住宅には、近世の米蔵、明治28（1895）年上棟の主屋、大正15（1926）年上棟の離れ２棟、茶室積翠庵等、江戸時代に仙洞御料庄屋を勤めた伝統と茶の湯の精神を感じさせる住宅建築が残っています。一方、庭園については関心が高いのですが、意外に庭を構成する要素については知られていないようです。庭園は主屋、離れ、茶室等の建物と一体のものであり、旧西尾家住宅を理解する上で欠かせないものといえ、今回は特に庭園を構成する要素の一つである石燈籠を取り上げ、ご紹介します。

石燈籠は照明用に建てられた石造物で、極めて種類が多くて様々な形がありますが、最も一般的な春日燈籠を例にすると、上から宝珠・笠・火袋・中台・竿・基礎等で構成されています。飛鳥時代に仏教用具の1つとして日本にもたらされ、当初は仏前に灯を供えるものとして使われたものです。平安時代以降には神社にも取り入れられ、社殿前や参道に数多くのものが建てられました。庭園に石燈籠を置くようになるのは桃山時代以降とされ、茶の湯の文化の発展に伴って茶庭で照明具と添景物（景色に趣を添えるもの）としての役割で用いられるようになりました。

旧西尾家住宅の石燈籠は、主に茶室積翠庵前の庭園、主屋書院前大庭、離れの庭園に配置され、茶庭の石燈籠が主体で、現在19基が確認されています。灯をともすという燈籠としての最も重要な役割をもつ火袋の形状によって、四角形石燈籠と六角形石燈籠に分類できます。四角形石燈籠は（１～７）の７基、六角形石燈籠は（８～19）の12基があります。四角形石燈籠は、笠以下が四角に統一され、三ツ星の窓がある一休型（１・２）、四脚の雪見燈籠（６）があります。

六角形石燈籠（８～14）は請花付きの宝珠、波形六角蕨手付きの笠、六角形の火袋・中台、円形節付きの竿がセットとなる、よく似た形のもので、これらの中にいわゆる名物燈籠の写し（広隆寺型、平等院型、般若寺型、春日燈籠）があります。広隆寺型（８）、平等院型（９）、般若寺型（10）は共通して火袋に円窓があります。（８）は火袋上・下部に横格子、中部に縦格子が刻まれ、（９）は火袋が二方に大きく開いているのが特徴で、（10）は火袋に孔雀・牡丹・獅子の彫刻があります。春日燈籠（12）は火袋に鹿・三笠山の彫刻があり、日・三日月の窓があります。

旧西尾家住宅の石燈籠は近世以降のものと考えられますが、さまざまなタイプのものがあり、その形や彫刻の違いをじっくり観察すれば興味深いものがあります。（西本安秀）

番　号	宝　珠	笠	火袋	中台	竿	基礎
1～3	宝　珠	四角	四角	四角	四角	四角
4	＊1	円形	四角	円形	＊3	円形
5	—	四角	四角	円形	円形	生込
6	宝　珠	四角	四角	四角	四脚	—
7	宝　珠	四角	—	—	—	—
8・9・12	宝珠＋請花	＊2	六角	六角	＊3	円形
10・11・13	宝珠＋請花	＊2	六角	六角	＊3	六角
14	宝珠＋請花	＊2	六角	六角	＊3	不整
15	宝　珠	＊2	六角	六角	＊3	六角
16・17	宝　珠	六角	六角	円形	＊3	生込
18	＊1	＊2	六角	六角	—	—
19	宝珠＋請花	波形六角	六角	六角	六角	六角

＊1　宝珠（削り出し）　＊2　波形六角蕨手付き　＊3　円形節付き

＜火袋の彫刻＞
孔雀・牡丹・獅子…10
鹿・三笠山……12
鹿……13，15
蓮華……16
四方仏……19
船……2

＜火袋の窓＞
円……8～10，13～15，18
四角……6，19
三ツ星……1，2
重ね鱗……5
日・三日月……3，4，12
日・三日月・三引…16，17

旧西尾家住宅の石燈籠一覧

石燈籠（10）の細部

「むかしのくらしと学校」展へのいざない

学校団体下見説明会風景

「むかしのくらしと学校」展が始まりました。平成11（1999）年度から、小学校３年生の社会科学習の一環として毎年開催する企画展です。

開幕翌日の12月10日、市内の３年担任の先生方を招いて恒例の「学校団体下見説明会・抽選会」を教育委員会指導課と教職員の研究組織「学研」社会部と博物館が共同で開きました。

まず、常設展示の「吹田の歴史」、講座室の「あかりの歴史」と「むかしのくらしと学校」の３つをまわってもらいました。４分の１は博物館が初めてという若い先生方。火打ち石・赤ちゃんおんぶ・台ばかり等の体験コーナーでは、まるで子どもたちと同じ笑顔と歓声が響きわたりました。年配の先生の「懐(なつ)かしい」との声。嬉(うれ)しかったのは、「以前に比べて、子どもたちが楽しく体験するコーナーが充実している」という感想でした。

毎年、先生や子どもたちから感想を集め、博物館からのコメントも含め全部の学校にお送りしています。言いっ放しにならないように、ボランティア会議で論議し可能な物から取り入れています。

今年は「昔の便所がほしい」という声に応えて、夏休みからボランティアの皆さんと厠(かわや)作りに挑戦しました。日本民家集落博物館に出向き、白川郷や椎葉(しいば)村、十津川村の便所を写真に撮影しました。今までの展示廃材を活用して、「落とし込み便所」と「小便(しょうべん)たんご」が生まれ、製作途中のボランティア会議での声から物干し、流し台が新たに加わり、日本手ぬぐいや手洗い、ざる、壺(つぼ)、落とし紙等の小物も次々に持ち込まれました。

説明会での先生方の興味や驚き、感動はきっと子どもたちに伝わるでしょう。１・２月の学校見学の日程はすぐに埋まりました。抽選を終えて帰り際に、いつもは当日配布する「むかしのくらしと学校」展のパンフレットを50部、100部と抱え、暗くなった夜道を急ぐ先生方の姿に感激もひとしおです。

このあと、博物館に来たくても来られない遠方の学校への出前授業、他市からの学校見学が追加決定され、嵐のような２ヶ月がスタートします。期間中の日曜日には「読み聞かせ・紙芝居」「昔のおもちゃ作り・謄写版(とうしゃばん)」「草履(ぞうり)作り」「火おこし」の４つの親子体験講座と学芸員によるトーク「トイレの歴史」が準備されています。

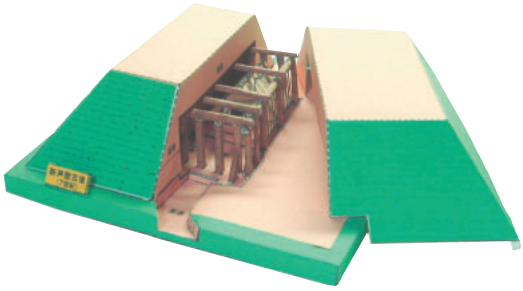
「むかしのくらしと学校」展示場

博物館で働くようになって３年間で約１万人の子どもたちと「あかりの歴史」の授業をしてきました。今年も３千人以上になると思います。来年からは、職員からボランティアへと立場をかえ参加したいと考えています。４歳と２歳の孫が小学校３年になって、博物館に学習しに来るまでは老体にムチを打って頑張ろうと思っています。

（香坂康樹）

ペーパークラフトで歴史を学ぼう 3

ペーパークラフトの新作ができましたのでご紹介します。NO. 9 新芦屋古墳は当博物館内に実物大で復元された新芦屋古墳の模型をモデルにしたものです。NO.10江戸時代のトイレは今年度の「むかしのくらしと学校」展でのトイレの展示に伴って制作したもので、江戸時代の関西での共同便所をモデルにしています。今後もさらにさまざまなものの制作に取り組んでいきます。



NO.9　新芦屋古墳

NO.10　江戸時代のトイレ

特別企画「むかしのくらしと学校」展関連等イベント

親子体験講座

「読み聞かせと紙芝居」

1月25日（日）

午前の部　10時～11時30分

午後の部　1時30分～3時

講　師　朗読工房のみなさん

申　込　1月15日（木）必着。

むかし話の読み聞かせと紙芝居を行います。

「やさしいおもちゃ作りと謄写版体験」

2月22日（日）

午前の部　10時～12時

午後の部　1時30分～3時30分

講　師　シルバーアドバイザーのみなさん、
佐竹台小学校　三木敏正先生、横山博明さん

申　込　2月12日（木）必着。

竹を素材とした昔ながらの遊び道具や、牛乳パックなど身近な材料を使ったおもちゃ作りと、昔の学校で使われていた謄写版刷りをします。

「ぞうり作りーわらぞうり・ぬのぞうりー」

3月8日（日）

午前の部　10時～12時

午後の部　1時30分～3時30分

講　師　博物館ボランティアのみなさん

申　込　2月26日（木）必着。

わらぞうりやぬのぞうりなどのぞうり作りに挑戦します。

「昔のあかりと火おこし体験」

3月20日（祝）

午前の部　10時～12時

午後の部　2時～4時

講　師　当館職員

申　込　3月10日（火）必着。

ろうそく、行灯、石油ランプなど、昔のあかりを学習し、火打ち石やマイギリなどの火おこしを体験します。

■会　場　いずれも博物館2階講座室
■定　員　親子体験講座の定員は午前、午後の部とも各20組です。多数抽選。
■申　込　親子体験講座は、はがき、またはＦＡＸで、希望の時間帯、住所、参加者全員の氏名、学年、電話番号を書いて博物館まで。

博物館トーク

1月18日（日）　午後2時～3時
「史料にみる中世・近世のトイレ」　池田直子（当館学芸員）

2月15日（日）　午後2時～3時
「8世紀の吹田」　高橋真希（当館学芸員）

3月15日（日）　午後2時～3時
「弁才天の信仰と美術」　滝沢幸恵（当館学芸員）

＊いずれも博物館2階講座室　先着120名　聴講無料

●開館時間
午前9時30分～午後5時
●休館日
月曜日、祝日の翌日
12月29日～1月3日
http://www.suita.ed.jp/hak/

吹田市立博物館だより　第36号
平成21年(2009年) 1月9日発行
吹田市立博物館
〒564-0001
吹田市岸部北4丁目10番1号
TEL.06（6338）5500
FAX.06（6338）9886

この冊子は、4,000部作成し1部あたりの単価は47円です。